◆久松久子　選

友達であり、教わる事の多い俳人仲間の滑稽句を選んでみた。好き勝手な批評をお許しいただきたい。

売りし本買ひ戻したる霜夜かな　　中村昭義

買う時は定価でも、売る時は二束三文になってしまう。計算のできないうっかり屋さん。人間は、使わないと邪魔と思ってポイと捨てる人と、何でも後生大事にしていつまでも捨てられない人と、二通りに分けられる。私は後者の方である。

この句は、「霜夜かな」に懐の寒さも表現されて面白い。

ごみの日や似合うてゐたるちやんちやんこ　　昭義

昭義さんはアメリカ帰りの紳士だが、その人がちゃんちゃんこを着られるとは。自分から似合うと言っているあたりや、「ゴミの日」が響き合って、滑稽味たっぷり。

冬の朝牛乳瓶に歯が当たり　　徳永真弓

「歯が当たり」に、カチッとした寒さがよく出ている。寝坊して牛乳だけでもと急いで飲む様子がよく分かる。友人としては、温めるのに五分もあればすむのにと思う。体を冷やさないように、ちょっと温めて真弓ちゃんの好きなもっちりパンも食べてね。

托鉢僧に辞儀する鹿や冬うらら　　不破秀介

托鉢僧も鹿も人からものをいただくもの同士だから、仲間として挨拶しているとも、鹿の僧に対する敬意とも見える。奈良にお住まいの秀介さんならではの一句。

私事だが、鹿にまつわる思い出がある。若草山の吟行に参加した時のことである。後から近付いてきた鹿に気づかず、迂闊にも俳句手帖を銜（くわ）えられ逃げられてしまった。一目散に逃げる鹿を追い掛けながら「誰かあの鹿の銜えている物を取ってー」と叫んだ。前方から来た男の人が走って奪い返してくれた。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

俳句手帖は、俳人には金より大事。午後からの句会の虎の巻だ。手元に戻ってホッと安堵したが、手帖に付いた鹿の唾液のベタベタの粘りの強さには閉口した。奈良では鹿は神の使いとされているが、ひょっとして俳句位作るかもしれないと思った。

瓦煎餅齧る音して日向ぼこ　　檜崎美和子

美和子さんは、高校の教師をなさり、多才な趣味の持ち主。俳句以外にも謡曲、現代音楽、絵画や、その上、句会のお手伝いも引き受け、車の運転もなさるバイタリティあふれる才女である。

この句は、暇な人をうらやんでいる句と思う。「音立て」でなく「音して」となっていることで、他人を詠んでいると分かる。

風が磨く大仏の膝寒に入る　　山本三樹夫

寒空に囲いもなく在す大仏様に容赦なく風が吹きつける。大仏様を気遣っている句である。仏様でもまだまだ磨くところがあると宣っているところに滑稽味が出たと思う。

次は、句会仲間を追悼する句である。

雪のバス窓いつぱいに笑ひゐし　　徳永真弓

冬青空豪快な笑顔下さる　　沖増修治

二句とも悼句であるが、悼句には禁物の笑いが入っている。しかし、故人の一番の特長を捉えていて、その大らかな笑い声が現前と遺されている。

そして、その笑い声をもう二度と聴けないのだという悲しみの大きさが出ている。笑顔や笑い声と悲しみが相乗の深みを出している。

初太鼓ぶるると山河うち震ひ　　望月清彦

太鼓の一打を以て山河を震わせたと言う宇宙的な大きな句だ。「ぶるる」は山河の震えであるが、太鼓の打ち手の武者震いの身体の動きとも読める。山河を擬人化して、些かの滑稽味もある。

塗り椀にてまり麩遊ぶ松の内　　豊田昌代

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

京都の近くでは、正月にはてまり麩を吸物に浮かすのが習わしとなっている。ビー玉位のまるい麩にピンクや空色の線が入っていて、愛らしくて食べるのが惜しいほどである。作者は絵が上手だから、尚更でしょう。

「遊ぶ」の表現で滑稽も加わり、椀の中で回る麩が生き生きと見えてくる。

葱坊主いたづら心高ぶらす　　加藤美代女

刈り取りの後の畑に残された葱坊主。種として残されているのだろうが、畑はおいらが守っているとばかりに立ち続けているように見える。擬人化に滑稽味が出た。

義経の腰掛石や鳥雲に　　中條ひびき

義経になったつもりで北へ帰る鳥どちを仰いでいる景。ひびきさんは、神戸に長くお住まいの方で、一の谷の源平合戦の歴史跡を知り尽くしておられる。ひびきさんだからこそできた句で、義経をもってきたあたりが句に深みを出している。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。